

帰郷

私は故郷のK町に向かった。一人暮らしの母が脳卒中で倒れ、町の病院に運ばれたと連絡が入ったからだ。

F駅で新幹線を降り、小雪のちらつく在来線ホームでなかなか来ない電車を待っていた。家路を急ぐ人たちの中で、自分のまわりだけ空気が止まっているように感じた。やっとホームに入ってきた電車に乗り込むと、一番隅の座席に身を沈めた。動き始めた電車の揺れを体を感じながら、目を閉じていると、朝からのことが思い出された。撮影現場に出掛けようとした時、電話が入った。詳しいことは分からなかったが、とりあえず監督にだけ事情を話して急いで東京を出てきた。

私はK町で生まれた。父は、私が幼い頃に亡くなり、母は女手一つで私を育てた。高校を卒業すると、俳優を目指して一人上京した。幸い劇団の研修生になることができた。演技の練習の合間には、食べるために夜昼となくアルバイトをして金を稼いだ。ようやく端役ではあるが、仕事をもらえるようになり、少しずつ映画やテレビにも出演するようになった頃には、三十も半ばを過ぎていた。今では、一人暮らしなら何とか食べられるようになっている。そういえば、母のところへ帰ったのはいつだっただろう。母の声を聞いたのはいつだったのか。思い出せない。母は、いくつになっただろう……。

「……七十歳になるのか。」

窓の外は暗い。小さな明かりだけがちらちらと点滅して去って行く。

「命に別状はないだろうか。」

私はコートのポケットに入れた手を強く握り締めた。

ふと気が付くと、車両には数人しか乗っていない。

K駅の階段を駆け下り、雪が一段と激しく舞う中を、タクシー乗り場に急いだ。開いたドアに身を滑り込ませると、ドアがまだ締まり切らないうちに、

「町立病院に急いで下さい。」

と、告げた。

私のただならぬ様子を察したのか、運転手は返事をしてちらっと私を見た。

病院に近づくと、運転手は、

「正面は閉まっていますから、夜間入口に回しましょう。」

と言う。礼を言ってタクシーから降りると、受付で、名前を告げて病室を聞いた。エレベーターを降りた私は、病室の前で少しためらって、ドアに手をかけた。

私の目に飛び込んできたのは、ベッドに横たわる母の姿だった。ベッドの向こうに座っていた老夫婦が同時に立ち上がった。

「母は……、どうですか。」

「大丈夫。命に別状はないそうよ。」

ひそやかな声でおばさんは答えた。

「今はもう、落ち着いて眠っている。」

おじさんは、私の顔を見つめて言った。

私は大きく息を吐いた。

「ありがとうございます。」

私はただ、頭を下げ続けた。

「研ちゃん、かばんを置いて、お座りよ。疲れただろう。」

おばさんは、そう言って、自分の座っていた椅子を持ってきた。

「おじさん、おばさん。何から何までお世話になって本当にありがとうございました。お二人こそお疲れでしょう。今夜は僕がいますから、もう、お家で休んでください。」

老夫婦をエレベーターまで見送り、病室に戻ろうとして、廊下の明かりが落としてあるのに気が付いた。

腕時計を見ると十時を回っている。

病室に戻って改めて母の顔を見る。母の顔に苦痛はなく、寝息は穏やかだ。

翌朝、夜のうちに降った雪が一面に白い世界をつくり、朝日にきらきらと輝いていた。

私がまどろみから目を覚ますと、母が見つめていた。

「研一。心配かけたね。」

気丈な母の声とは思えぬ弱々しい声だった。

「何言ってるんだ。」

私が、立ち上がろうとした時、老夫婦が入ってきた。

「研ちゃん、朝ごはん、まだだろう。」

と、言って岡持ちから皿を出した。

「朝ごはんらしくないけど、チャーハンだよ。子どもの頃好きだったよね。」

老夫婦は、私たち親子が住み込みで働かせてもらっていた中華料理店を経営していた。

おじさんは自分たちのまかないを作る時は、私の食事も必ず作ってくれた。おじさんに、

「研ちゃん、今日のまかない何にしようか。」

と尋ねられると、いつも、

「チャーハン。」

と、答えたものだった。

老夫婦はすでに店をたたんで年金生活を送っている。母がその店を借りて小さな居酒屋を開いた時も何かと力になってくれたと母は手紙で知らせてきた。その老夫婦が、私の好きであったチャーハンを朝から作って持ってきてくれた。私は、おじさんが差し出したチャーハンの皿を押し頂くように受け取った。私の胸に熱いものが流れるのを感じた。

「研一。昨日の晩、寝てないだろう。家に帰って眠っておいで。」

母に促された。眠る気はなかったが、身の回りのものを少し持ってこようと、老夫婦と一緒にかつて親子で住んだところに向かった。

「研ちゃん。佐知子さんのことだけど、軽い後遺症が残るかもしれないとお医者さんが言っていたけど。」

「そうですか。リハビリが必要になるんですね。」

店には、おじさんの字で、

〈都合によりしばらくの間休業します〉

という張り紙がしてあった。母の店は、母の美味しい手料理と優しい人柄で町の人が集まっていたらしい。

母の部屋で入院生活に必要なものをまとめていると、引き出しの中に小さな包みがあった。私

名義の通帳だった。見ると私が母に送金したものがそのまま貯金されていた。また、私の芸能活動のスクラップ帳も出てきた。何度も何度もページをめくったのだろう。端がすっかりめくれてしまっている。しかし、先ほど通ってきた一階の店の方には、私の写真は、一枚もなかったように思う。

病院に戻ると、さっそく見舞い客があった。町の人で店の常連さんたちだという。私が入っていくと、

「えっ、研一さんって。俳優の……。」

「おばさん、何にも言わないんだよ。なんでだよ。」

母は黙っている。それで私には、店に写真が一切ないことの原因が分かった。母は、きっと私の俳優としてのイメージを壊さないようにと思ったのだろう。私はそんな母のことを気に掛けもせず、遠く離れた都会で一人でのうのうと暮らしてきた。

見舞い客の帰った後、私は母に言った。

「母さん、東京で一緒に暮らそう。」

母は、首を振った。

「だって、しばらくリハビリも必要なんだろう。もう遠慮しないでいいんだよ。」

「この町がいいんだよ。」

母が、ぽつりと言った。

その言葉を聞いた老夫婦は顔を見合わせた。

「研ちゃん。私たちはまだ元気だから、私たちで良ければ、佐知子さんのリハビリや身の回りのことは手伝うけど……。」

おばさんは、遠慮がちに申し出た。

私は驚いた。確かに長年世話にはなったけれど、病気になった母をお願いしますとは言えるはずがなかった。

「研ちゃん、私らだけじゃないんだよ。さっき見舞いに来た連中だって、ちよくちよくのぞくって、言ってるんだよ。」

嫌がる母を東京に連れ帰ることは難しい。しかし、母のことは私が面倒を見なくてはいけないと思っている。母は、この町でどんな人たちとつながっているのだろう。大人になってこの町で暮らしていない私には分からない。甘えさせてもらってもいいのだろうか。

頭を上げると二人が私をじっと見つめている。その目は優しかった。

「ありがとうございます。母とゆっくり話し合ってみます。」

私は、ただこの言葉しかなかった。

ドラマの撮影のため、とりあえず一度東京に戻らなくてはならず、翌日私は駅に向かった。

「研一。」

と声を掛けられて振り向くと、中学校の同級生の雅也であった。

「お母さん、悪いんだってな。大丈夫か。」

思いがけないことだった。雅也とは、特別仲が良かったわけではない。それでも病状を尋ねてくれる。そんなぬくもりがこの町にあったのか。

来た道を引き返す電車に乗った。私は優しさに包まれていた。

窓から見える山々は雪を残しているが、やわらかい光があたっている。